

るを得ない。西洋由来の小分けにされた学問領域は著者の批判の対象であるが、逆に、現状主流のそのような学問領域区分を拒否した議論は、どこか掴みどころがない感じになって、特に、イスラームを超えた文脈で普遍性を持ちにくい議論となっているのではないだろうか。実際、イスラームの「モラル的コスモロジー」という言葉が何度も散見されるが、その「モラル」あるいは「コスモロジー」とは何なのか、構成要素は何なのか、真っ向から向き合った議論は見受けられない。一方で、著者の視点が普遍性を持つとすれば、前近代の思想を呼び起こしている点である。著者は、前近代と現在では、西洋思想とイスラーム思想はどちらも関係があるのは同じであるが、その関係性の質が異なると述べている。さらに、西洋思想においても、啓蒙主義の時代以降に経済から倫理的なものが抜け落ちるようになってしまったとも述べている。前近代のイスラーム知識人の、一見非常にイスラーム的と思える思想を再考し、それを前近代の非イスラーム思想との関係性も踏まえて論じることで、巡り巡って普遍性を備えた議論となる可能性があると言えるのではないだろうか。

二点目は、実社会との結びつきの希薄さである。著者は、現代のムスリム経済学者の議論は、ムスリム社会の現実を反映していないために非常に概念的であり、それを乗り越えるために、前近代の思想を掘り起こす必要性を説いているが、第3章で著者が行っていることは、一つ一つの項目に対する古典的ムスリム学者の言説の紹介であり、こちらも概念的であるという指摘は免れない。実際、イスラームの理念、著者の言葉を借りれば「コスモロジー」を体現した社会など現代には存在しないのだから、概念的になるのも致し方ないとも思えるが、一方で、現代のイスラーム社会には、イスラームの描く社会経済発展ビジョンを体現しようとする取り組みが、規模は大きくないかもしれないが確かに存在する。例えば、現代イスラーム金融を主導してきたマレーシアでは、金融の分野に加え、現金や株式をワクフに設定し、その収益をもとに慈善事業を行うということが行われている。これらの取り組みを、西洋的モダニズムの生み出したものと切り捨てるのか、著者の言うモラル的コスモロジーの一部として捉えるのか。そこに時代を超えて存在するイスラームのモラルティの輪郭を見出すことも可能ではないだろうか。

<参考文献>

- グレーバー、デヴィッド 2016『負債論——貨幣と暴力の5000年』(酒井隆史・高祖岩三郎・佐々木夏子訳) 以文社。
- フォーコー、ミシェル 1966『言葉と物——人文科学の考古学』(渡辺一民・佐々木明訳) 新潮社。
- ポランニー、カール 1975『大転換——市場社会の形成と崩壊』(吉沢英成訳) 東洋経済新報社。
- 1980『人間の経済2——交易・貨幣および市場の出現』(玉野井芳郎・中野忠訳) 岩波書店。
- Khan, M. A. 2014. *What is Wrong with Islamic Economics?: Analyzing the Present State and Future Agenda*. Gloucester: Edward Elgar Publishing.

(筒井 華子 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

Beverly Dawn Metcalfe, Bettina Lynda Bastian, and Haya Al-Dajani. 2022. *Women, Entrepreneurship and Development in the Middle East*. New York: Routledge. xix+303pp.

SNSなどで、ファッション業界を中心としてムスリム女性によるビジネスを目にする機会が多くなっている。男女間の格差問題が度々議論されるようなイスラーム社会において、彼女達はどのようにして自らのビジネスを開拓してきているのかについて近年注目が集まっている。

本書は、経済面でのイスラーム復興が進んでいる中東地域において、様々な統治方法や組織がどのように起業と産業の発展を形成しているのかを説明するものである。現在中東地域では、女性の起業活動はそこまで拡大していないものの、関連する様々な研究が発展してきている。本書は、中東地域内部からの視点で女性とビジネスの関係を考察したものである。また、先進国による、イスラームと女性に関する偏った見方に反論することを目的とするとも述べられている。内容は、総勢27名の研究者による15本の論考が3

人の編者によりまとめられた形になっている。編者は、バイルートにある ESA ビジネススクールの訪問教授でありインドにある Aimers 女性センターの女性エンパワーメントにおける調査監督でもあるビバリー・ドーン・メトカーフ、バハレーンの王立女子大学で起業と国際ビジネスを教えるベッティナ・リンダ・バステイアン准教授、そしてサウディアラビアのモハメド・ビン・サルマン・ビジネス起業大学 (Mohamed Bin Salman College for Business and Entrepreneurship, MBSC) で起業について教えるハヤー・アル＝ダージャーニー教授である。

全体の章立ては、以下の通りである。

第1部 イスラム経済の視点と起業開発

第1章 モスクとサテライト

——中東の女性による起業の発展におけるマルチレベル、マルチエージェンシーな原動力の調査

第2章 イスラム、女性の起業、ビジネス倫理——古典的なイスラムの言説に対する批判

第2部 中東における起業実践と組織

第3章 UAE の女性起業家——彼らの働きと価値

第4章 転換するサウディアラビアの女性の起業

第5章 バハレーンの起業の性別表現

——ソーシャルビジネスにおける女性起業家の批判的な言説分析

第6章 レバノンの起業における性差

第7章 ヨルダンにおける女性の起業を強化する起業環境

第8章 どのようにして起業にするか？——カタル女性の場合

第3部 政策課題と女性の起業開発の機会

第9章 起業開発支援における女性組織の役割とイスラム的フェミニズム

第10章 パレスチナとサウディアラビアにおける女性起業家の人的資本開発へのアクセスと学習機会——国を横断しての比較

第11章 湾岸諸国における公共セクターのための女性の起業リーダーシップ教育——多様性と包括性のためのカリキュラムの価値

第12章 アラブ中東の紛争状況における起業

——エンパワーメントとレジリエンスに対する性別認識

第15章 起業の必要性再考——上エジプトにおける零細企業開発経験語り

第16章 エジプトのデジタル起業空間における女性を支援する女性

第17章 結論——MENA 地域における起業開発研究の道のり

本書は3部構成となっており、まず第1部でイスラムにおけるフェミニズムの概念や起業活動に対する基本的な姿勢を説明している。

第1章では、アラブ中東地域の女性についての概要が示されている。2021年のアラブ諸国における女性エンパワーメントに関する世界経済フォーラムにおける統計によると、イスラム的なフェミニズムは女性の発展、特に起業開発の分野で推進力を発揮している。このような文脈下でイスラムにおけるフェミニズムの概念とそれを考察する上で重要な点を述べ、女性の起業開発とエンパワーメントに影響を与えている要素を提示している。更に、将来的にSDGsに沿ったイスラム経済開発モデルを提唱する際に必要な要素についても言及されている。

第2章では、女性の起業に対するイスラム的なアプローチの理論的な基礎を分析している。特にシャリーアの規定と枠組みを参照して、古典的な文献から見られるイスラムのビジネス倫理と価値観を考察している。この中では本来のイスラムの枠組みでは多様な仕事に従事する女性の姿も描かれていると述べ、現代の文脈では女性の起業活動に関して誤った解釈がされていると指摘している。

続く第2部では、中東各地域での起業実践とそれを取り巻く環境について、現状を明らかにしている。

第3章では、UAEの女性起業家に焦点を当て、女性起業家たちの原動力となる要素を定義づけている。

男女の不平等が特に顕著であり、原油産油国である UAE における女性起業家達に見られる特徴を挙げたうえで、聞き取り調査を通して彼女達の起業動機に影響を与える要素の分析を行っている。その中でも最も影響力のあるものは、個人的な経験から生じた課題への反発力であると述べている。

第4章では、サウディアラビアにおいて女性の起業を実現するための制度環境の重要性を示している。サウディアラビアでは市場ベースの組織を発展させるために経済構造が変化していると説明したうえで、そのような変化が女性の起業に与えた影響を考察している。結果として、近年女性の社会参加が促されてはいるが、依然として男女の不平等は見られ、それを是正するための制度が求められていると述べている。

第5章では、バハレーンにおける近年の社会と経済の変化が女性起業家の意識へ与えた影響について述べている。ここではアラビア語と英語の記事をもとに分析を行っており、そうした文書の中で政府が女性の抬頭を促進する動きがあるなど希望を見出せる部分もあると認めている。その上で、現実女性が直面している困難を正確に伝えていなかったり、女性の伝統的な役割が根付いていたりするという点を今後の課題として認識していかなければならないと指摘している。

第6章では、レバノンの女性起業活動に見られる、性差を決定づける要素について言及している。比較的レベルの高い教育を受け、安定した収入を得ている女性が起業するというケースが多いレバノンにおいて、「仕事と家庭のバランス」が女性にとって最大の障害となっていることを明らかにしている。更に、職場での差別やセクハラ、キャリア形成の場における性差などについても言及し、依然として女性が起業活動を進めていくうえで困難が多いという現実を提示している。

第7章では、ヨルダンにおける起業活動促進の試みについて、実際に女性の起業活動環境がどれほど改善されたのかを明らかにしている。政府の政策としてどういった点に力が入れているのかを説明したうえで、現状からの考察として政府のイニシアティブのレベルが十分でないことを指摘している。また、この点を改善するためには女性の起業活動に対する関心をより高めるとともに、起業訓練サービスやビジネスネットワークの充実が必要であると主張している。

第8章では、カタルの女性起業家の発展について、それを促進する要素と主な課題を分析している。現状、教育水準が比較的改善された点を認め、それを経済におけるエンパワーメントにどう転換しているのかを考察している。更に、従来とられてきたトップダウン型アプローチでは制度的な面での実現が十分にできていないとし、改善のためにはより性別に特化した情報収集が必要であると述べている。

次の第3部では、起業活動を支える上で必要な教育やコミュニティへのアクセスの現状と課題を提示し、将来的にどのような改善が望まれているのかを考察している。

第9章では、起業支援のための教育と開発を指揮する女性の役割について説明が行われている。世界でも女性の労働市場参入が最も低い中東地域において、アラブの春以降にイスラーム的フェミニズムが広がった流れと、女性組織形成の背景を説明している。特に女性組織形成の背景としては、国ごとに多様な形態があるということを述べたうえで、その特徴を大きく分けていくつかに提示している。更に、社会の変革にとって女性同士のネットワークが重要な役割を果たさだろうと主張している。

第10章では、女性による起業の成功にとって重要な学習機会について、起業活動との関係性を明らかにしている。ここでは、教育レベルが比較的高い一方で女性の労働市場参入が少ないパレスチナとサウディアラビアを事例として取り上げ、起業が成功するためには事業を支える組織的な環境整備が必要不可欠であると主張している。また聞き取り調査を通して、どういった状況下で教育へのアクセスが困難になるのか等の課題について考察を行っている。

第11章では、湾岸諸国における女性の起業リーダーシップを発展させる教育について、その内容と発展の過程を説明している。特にイスラームの基本的な価値観を取り上げ、これが個人の発展という点で起業の理念を含んでいることを示している。更に、グローバル化する世界において、多様な文化の中で共通するリーダーシップの定義が生み出されていると指摘し、その中では文化的な知識を持って適応していくことが必要であると述べている。

第12章では、紛争地域での女性の起業活動を取り上げている。紛争地域ではジェンダーギャップが最も大きく、女性たちは身体的な危険にさらされている。こうした状況下での起業に見られる特徴をまとめ、女性起業家たちの活動が広範囲にわたってコミュニティに影響を与えているポテンシャルは何かということ

分析している。ここでも、個人の発展を促す要素として困難に対する反発力が強い影響力を持っていると述べ、これは持続可能な活動の実現にもつながると主張している。

第13章では、上エジプト地域における零細企業の発展に関して、貧困を脱するためのマイクロファイナンスにおける非経済的利益について考察している。女性たちが投資を受けて自らお金を稼ぐことにより、家庭内での自律性を感じられるといった精神的な安定を得られることが利益として挙げられている。その上で、貧困といった要因により起業のための教育などが影響を受けることはあれ、機会さえあれば女性たちはビジネスを始めることができるのだと述べている。

第14章では、エジプトのデジタル起業スペースにおける女性のサポートについて説明している。アラブ世界のIT産業は比較的新しく、男女差もそれほどない分野である。この中で女性起業家の活動における課題点を提示し、更にフェイスブックを用いたデジタルコミュニティの実例をもとに、こうしたデジタルスペースが性別の問題を解決する糸口になるであろうと主張している。

第15章は、本書の結論部分となっている。第1～14章までの内容をまとめ、そこから見えてくる課題と改善点を明示している。更に、COVID-19の影響で経済・ビジネスの世界が大きく変化したことを踏まえ、今後は今までと異なる発展の仕方をするのではないかと予想したうえで、起業に関する研究はどうあるべきかを論じている。

以上に述べたように、本書では中東地域における様々な国の実例が取り上げられている。

まず、中東地域における女性起業家の活動に関する課題として、中東地域では女性の家庭内での役割に関する伝統的な認識が根付いており、家庭とビジネスのバランスを取ることが大きな課題となっていることが分かる。更に、女性の高学歴化・社会進出は進行しているが、社会制度へのアクセスや職場での立場などに関しては依然として男女差が見られ、これは女性起業家にとって打開すべき障壁である。更に、中東地域は依然として紛争が多い地域であり、事業を行うとしても活動の拠点を固定することが現実的でない場合も多いだろう。このように女性が外の世界で実際に働くことに対して、依然として困難な状況が多い中東地域で、女性たちがビジネスを始めるための活動や、その中で何が必要とされているのかを明らかにしたという点が本書の意義であると考えられる。

他方、本書は、ムスリム女性の起業という点について、他のイスラーム地域との比較を容易にする様々な視座を提供している。例えば、評者の研究対象である東南アジア地域におけるムスリム女性の起業活動と比較した時、いくつかの共通点が挙げられる。マレーシアにおいても職場や家庭内における男女間の格差が存在しており、そのため女性起業家のための教育活動が重要視されている。更に、女性たちが自らの事業を立ち上げるにより家庭内でより自立性を得られるという事例も共通して見られる。また、女性起業家がある程度成功しやすいビジネス部門があり、それは美容・手芸などに関する事業内容であるという点も共通している。一方で、東南アジアは本書で取り上げられる中東地域の現状と比較すると、女性起業家の活動は一歩先の段階に進んでいるのではないかと考えられる。例えばインドネシアでは1990年代頃からファッション業界において女性たちが自らのブランドを立ち上げ中心的存在となって活動の幅を広げていった。こうした事例を見ると、中東地域に比べ女性の労働市場への参入や女性組織の形成は早い段階で行われていたと言える。中東地域では、アラブの春以降に本格的なフェミニズムが広がったことで女性の労働市場参入の在り方が見直されるようになったと述べられている。したがって女性起業家のための支援事業や制度の策定という点については、中東地域は東南アジア地域のものを参考にできる部分も多いと考えられる。

本書の内容としては、中東地域における女性の起業活動というものが比較的新しい動きであることもあり、全ての事例において現状を分析することが中心となっている。将来の動向の推測や、課題に対する有効な改善策として具体的にどういったものが考えられるかについては、更なる考察が期待できる。特に、本書の事例をイスラーム世界の外の事例を比較することで、新たな考察ができるのではないだろうか。例えば、世界的に見て女性の社会進出が進んでいると言われる北欧の国々に着目し、その社会的な枠組みを分析してイスラーム世界や中東地域と比較することも可能なのではないか。もちろん、宗教や歴史など文化的な背景の違いは大きいですが、女性の社会進出、起業活動の発展という同じ目標を掲げる枠組みにおいて、少なからず中東地域やイスラーム世界に還元できる点があると考えられる。将来の見通しという点に関しては、未だ取

東の兆しを見せない COVID-19 の影響がどのような変化をもたらすか想像するのは難しい。しかし、現代ではインターネットを通してビジネスを始めたりコミュニティを形成したりすることが比較的容易になっているので、ムスリム女性がビジネスで活躍する場は今後も広がっていくだろう。

〈参考文献〉

- 野中葉 2015 『インドネシアのムスリムファッション——なぜイスラームの女性たちのヴェールはカラフルになったのか』 福村出版。
- Lai, Ling Yee, Shazali Johari, Diana Emang and Poh Yee Thoo. 2022. “The Motivation of Female Social Entrepreneurs in Lundu District, Sarawak, Malaysia,” *Asian Women* 38(1), pp. 34–58.
- Prameshwara, Anggahegari, Gatot Yudoko and Bambang Rudito. 2018. “Female Social Entrepreneur Movement in Indonesia,” *International Journal of Entrepreneurship* 22(Special Issue), pp. 1–13.

(藤島 妙 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)
